



## 第16回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

# 平等な社会

東京都・東京都立国際高等学校 2年 平 真央

「平等」という言葉を聞く機会が多い。国連の全加盟国によって採択された「持続可能な開発目標（SDGs）2030 アジェンダ」の中にも、「人や国の不平等をなくそう」、「貧困をなくそう」など、「平等」を呼びかける目標がある。私は、経済面でいう「平等」とは、ただ発展途上国を先進国が援助して全員が同じだけのお金を持つことではなく、それぞれが住む土地や文化、伝統に寄り添った援助を通して作られる、世界中の誰もが自分たちらしく過ごすことのできる社会だと考える。

私は父の仕事の関係でブラジルに3年半住んでいたことがある。私が住んでいたのは、南米最大の都市と言われるサンパウロだ。そう言われるだけあって、街には高いビルやマンションが建ち並んでいて、一見、経済の豊かな国に見える。しかし私は、そこで「貧富の差」を目の当たりにした。私のような日本人や裕福なブラジル人は二十数階建ての良いマンションに住んで、安全のために防弾ガラスのついた車に乗る。その一方で、街中にはたくさんのホームレスがいた。日本ではホームレスを見たことがなかった私は、その光景に非常に驚いた。高級ブランドのお店がたくさん入ったショッピングモールの近くに段ボールを敷いて、道行く人にお金を求めるホームレスがたくさんいた。高い塀で囲まれた日本人学校の周りには、ファベラと呼ばれる貧民街があり、そこに住む人々は自分たちでレンガを積み上げ、傾斜のある土地にギューギューに詰めて家を建てて暮らしていた。自分はレストランで晩ご飯を食べて、車に乗って家に帰っているのに、外には裸足で歩く小さな子どもがいた。街中で、このような自分とあまりにもかけ離れた状況で暮らす人々を見ていながら、何もできないことに私は何度ももどかしい気持ちになった。その時私は、「貧富の差はなくさなければいけない。こんな違いがあるなんておかしい。貧富の差をなくすためには、私たちのような、恵まれている人たちが何か役に立たなくてははいけない。」と考

えた。しかし、本当にその考えは正しいのだろうかと考えさせられた、もう一つの経験がある。

それは、今年の夏休みにフィジーの村で2週間ボランティアワークをしたことだ。フィジーとは、南太平洋の諸島からなる国で、発展途上国である。ブラジルでの体験から、発展途上国での国際協力の仕事に興味を持った私は、フィジーのヴィトンゴ村という所で2週間ホームステイをしながら、村の幼稚園と小学校でのボランティアや、村の教会のペンキ塗りなどのボランティアを、世界中から集まった高校生と一緒にいった。ヴィトンゴ村は電気も水道も通っていたが、お湯は出ないのでシャワーは水であったり、家にはネズミが出たりして、日本やその他の先進国での生活とは大きく異なるものであった。ボランティアの友達の中には、カルチャーショックを受けて数日で自分の国へ帰ってしまった人もいた。先述した通り、日本と比べると、この村が貧しいことは確かである。しかし私は、「この村を助けたい!」という気持ちや、「この村には金銭的な援助が必要だ!」という考えには全く至らなかった。むしろ、自分たちは何のために来たのか不思議に思ってしまうほどだった。ボランティアに参加する前は、「貧しい子どもたちに勉強を教えてあげる」というのが正直な私のイメージだった。しかし実際は、教育の質は必ずしも高いとは言えないけれど、子どもたちは毎日制服を着て村の幼稚園・学校に通っていたし、村に住む人々は皆、大らかで優しく温かくて、会ったら必ず挨拶をしてくれて、いつも笑っていて幸せそうだった。また、村の人たちは家族や周りの人たちとの繋がりをとても大切にしている、人の温かみに触れる瞬間が多くあり、逆に私の方が大切なことを学んだくらいであった。

私はこのフィジーでの経験から、先進国による国際協力は、時に先進国側のただのエゴになってしまうこともあるのではないかと考えた。例えば、ヴィトンゴ村に対して先進国が援助する場合、教育の質を高めるために教員を育成したり、子どもたちの視野を広げるために色々な国の人と触れ合う機会を設けたりすることは村の人たちに受け入れられるかもしれないが、彼らの生活を急激に変えてしまうような援助であれば、誰も望まないだろう。

「開発途上国」、「発展途上国」などの言葉から、私たち日本人は「国際協力」や「貧富の差」などを想像してしまいがちである。確かに世界には、先進国の

助けが必要な国がたくさんある。しかし、その助ける方法を誤るとかえって混乱やトラブルを起こしかねない上、現地の人々の幸せを奪うことになるかもしれない。平等な社会を作るには、それぞれの地域の文化や伝統に合わせた援助を行い、この先何十年も幸せを持続できる社会を作ることが必要だ。そうしてできる、世界中の誰もが自分らしく過ごす権利・機会を平等に持てる社会こそ、平等な社会と言えるだろう。また、発展途上国だけではなく、先進国ももう一度、自国の課題を見つめなおし、発展途上国から学べることは学ぶべきである。

